

『グリーン・ノウの子どもたち』論*

——五感で楽しむファンタジー——

西澤 喜代美**

ルーシー・M・ボストン (Lucy Maria Boston, 1892~1990) の『グリーン・ノウの子どもたち』(*The Children of Green Knowe*, 1954) はとても不思議な物語である。7歳の少年トーズランド、愛称トリーはクリスマス休暇を過ごしに曾祖母オールドノウ夫人の住む古いグリーン・ノウ館を訪れる。そして館で1665年の大疫病で死んだ先祖の子どもたち、トビー、アレクサンダー、リネットの3兄妹と友達になるという物語である。この作品は1950年代、1960年代のファンタジー作家に多大の影響を与え、児童文学史上に残る作品であることは認められているが、作品の評価になると様々である。

館や、庭等の情景や雰囲気表現する描写力は、万人の認めるところで高く評価されているが、トリーと先祖の子供たちが一緒に遊ぶプロットについては、否定的見方をする批評家達も少なくない。J.P. ウォルシュは「ボストンの得意とするのは、プロットよりも雰囲気を描くことである。」⁽¹⁾と述べているし、J.P. タウンゼンドは「ある物語のなかの事件が、夢や想像ではなくて、「ほんとうに」あったことなのかどうかまぎらわしいということがファンタジーの作品にはしょっちゅうあって、少年少女の読者たちがもの足りなく思う場合がすくなくない。L. M. ボストンの『グリーン・ノウの子どもたち』(1954)と『グリーン・ノウの煙突』(1958)では、それらの問いは答えられず、さだかにならないままに空中をほのかにただよっている。」⁽²⁾と述べている。また『オックスフォード世界児童文学百科』には「ボストンの最上の作品は、いわゆる「詩的ファンタジー」のすぐれた見本で、ウォルター・デ・ラ・メアやエリナ・ファージョンをしのばせる面がある。だが、ときには本当らしさが失われ、読者をみくだし、印象に残る登場人物の創造者となる気も、人を興奮させる物語り作者になるつもりもなかった。その手腕は情景描写で最高に発揮されるもので...」⁽³⁾と書かれてある。

確かに、先祖の子どもたちは幽霊だったのか、広い古い館に一人で住んでいる孤独な年寄いたオールドノウ夫人の幻想だったのか、友達を求めるトリーのイマジナリイ・フレンドだったのか、夢だったのか、鏡の世界だったのかは、明確には語られていない。理性的に考えれば300年前の子どもたちと遊ぶ等ということが本当にあるわけがない。それでいて読み終わると、子どもたちは実在し、トリーは確かに子どもたちと遊んだのだ、と思わずにはいられないのである。現代の子どもと過去の子どもの時間が共有し一緒に遊んだということに、理性を越えたところでリアリティを感じさせるのが、ボストンの描いたファンタジーの特質であり、魅力

*A Study of *The Children of Green Knowe* — A Fantasy Appealing to Our Senses —

**Kiyomi Nishizawa, the Course of English Language & Literature

であるといえるのではないだろうか。

この作品を語るには、まず、この作品のモデルになっているザ・マナー (The Manor) について語らなければならない。ボストンが領主の館、ザ・マナーを購入したのは45歳になる1937年のことだった。この館に落ち着く迄の彼女の人生は波瀾に富んだものである。1892年イングランドのランカシャーで父が市長をつとめる裕福ではあるが厳格なピューリタン、ウェズリー派の家庭に生まれた。幼くして父親に死別するが経済的には困窮する事もなく、パリの花嫁学校で学んだ後オックスフォード大学に進学している。しかし第一次大戦が始まると退学し、フランスの傷病兵のための病院に看護婦として志願する。1917年に幼なじみの従兄弟のハロルドと結婚し1子ピーターをもうけるが、破局を向かえ1935年42歳で夫の許に子どもを残し離婚している。その後イタリア、オーストリアに滞在し絵や音楽の勉強をするが、第二次大戦が始り帰国せざるを得なかった。そして、彼女の人生に大きな影響を与えることになる、ケンブリッジに近いヘミングフォード・グレイにある、1130年頃建てられたという古い領主館ザ・マナーと運命的な出会いをするのである。「この館に初めて足を踏み入れたとき、館の空気はわたしを歓迎してくれているのが感じられ、わたしは興奮し喉を締めつけられるような気がしました。」⁽⁴⁾と自伝 *The Memory in a House* (1973) で述べている。この館に一目惚れしたボストンは八百年にわたって改築されてきた館を元の姿に戻すことに没頭し、建築家になっていた息子ピーターの協力を得て2年がかりで修復している。増築した部分を壊してみると1メートルもの厚さのオリジナルの石の壁が出てき、食器戸棚を壊すと堂々とした石造りの当時の古い暖炉が出てくるなど、この時が人生のなかで最も幸せな時であったと語っている。

しかしこの館はそうした古い建造物としての魅力に加えて、不思議な事の起こる館でもあった。彼女が友達と庭で草むしりしていると館の中が騒々しいので入ってみると、誰もいない館で振鈴の鳴る音が聞こえたり、夜寝ていると階上で騒々しい音がしたり、ドアをどンドン叩く音がするので行ってみると誰もいなかったりと、ポルターガイストがおこる館であったのである。

平成8年9月に来日したピーター氏は講演で、中二階の床を取り壊した時、何とも言えない悪しき霊に襲われ走って庭へ逃げた事、その後館には悪しき霊は出なくなったが、吹く人もいないのにフルートの音が聞こえ、庭では子どもたちの気配がする事等を語っている。氏によればこの美しいフルートの音が『グリーン・ノウの子どもたち』を書くきっかけとなったそうである。⁽⁵⁾

又、ボストン夫人の晩年に、館に下宿した林望氏は、氏の著書『イギリスは愉快だ』に或る冬の晩に、ボストン夫人と交わした会話を記している。ボストン夫人は館に住む幽霊たちについて、「この館にはね、何人もの幽霊が棲んでいますよ。でも心配はいらないわ。彼らはいってみればこの場所にずっと昔からいる精霊のようなものでね、なによりもこの館を愛している人達なんだから、私たちを守ってくれこそすれ、なにも害をおよぼしはしないのよ。それはもう、正真正銘たしかな現実として、私たちと一緒にここにいますよ。もしかすると、ほらそのあなたの後ろのあたりに来ているかもしれないわ。」と言いウオッホッホと笑って、館に住む数々の幽霊達について語ってくれたと言う。そしてそうした話を聞いた林氏は、「このイギリスで人

の実際に住んでいる家としては最古の住宅に住んで、幾度も、不思議な幽霊たちと出会い、そういうことを絵空事としてでなく、たしかな現実として知っていた夫人が、やがてこの美しい館とそこに住む先祖たちの幽霊を主題として『グリーン・ノウの子どもたち』のような作品を著したのは、蓋し、当然の成り行きだったといってもよい。』⁽⁶⁾と書いている。

ファンタジーには、起こりそうもないことが起こる、そしてそれがごく自然に受け入れられていくような雰囲気のある場所が、読者のイメージのなかでリアリティを持つことが大切なのである。そしてそのような世界へ無意識のうちに入っていくための入口も又必要条件であると言える。トーリーが大雨のなか初めて館を訪れた時、あたりはすでに暗くなっていて、付近一帯はノアの洪水を思わせる洪水で、館は一面水に囲まれている。館を取り巻く洪水は外界と館を遮断し、トーリーは迎えにきてくれたボギスさんとボートに乗って館に向かう。現実の世界と非現実の世界を隔てる境界線は無意識のうちを越していく、そんな気持ちにさせる導入である。そして洪水が退いた後も、館は川と堀で外界から遮断されていることを知る。

グリーン・ノウ館は1130年頃建てられ、厚い石の壁で造られ、トーリーが遠足で訪れたことのある古城に似ていた。今もって人が住んでいるのが信じられないような古い古い館である。この館ではどんな不思議なことが起こっても起こりうるだろうと思わせる不思議な神秘的な雰囲気が立ち込めている。そしてそうした館の持つ神秘的な、不思議な雰囲気を更に盛り上げ、現実と非現実の境界線が微妙に薄らいでいくように、随所に「鏡」が効果的に使われている。初めて玄関の間に入った時トーリーは三枚の大きな鏡に囲まれて、鏡が互いに写し出す世界の中でどれが本当の自分かわからない。リネットとアレクサンダーが初めてトーリーに姿を見せるのも、この玄関の間の鏡の中である。大きな鏡は、案内された屋根裏のトーリーの部屋にもかかっていて、同じように現実の物と非現実の物が同時に存在する不思議な効果を上げている。トーリーがベッドに寝ていると、小さな夜あかし蠟燭に照らされ、天井の梁、ゆり木馬、床の上の人形の家、天井の鳥かごの編み目の模様のみごとな影をつくり出し、そしてその長くのびてゆれている影の全てを鏡が、遠く、すこしかたむけて、反対に写し出している。ベッドのなかで目を覚ましている月明かりの夜等には、鏡の中に写し出されている部屋の全てがとても神秘的である。月の光に照らされている所は実際の部屋のなかより明るく、影の部分は不気味に見える。過去の部屋と現在の部屋が同時に存在しているような錯覚を覚え、かつて子どもたちの部屋であったこの屋根裏部屋に、今でも子どもたちが住んでいることが自然に思えてくる。

もう一つ巧みに使われている物は「暖炉の炎や蠟燭の炎」である。電気の光は全ての物をくっきりと写し出してしまいが、ゆらめく暖炉の炎と蠟燭の炎とは、光と影とが造りだす不思議な雰囲気のある空間を生み出す。初めてオールドノウ夫人の部屋に入った時、大きな石の暖炉では丸太と泥炭が燃え、たくさんのガラスの燭台に灯された蠟燭の光がゆらめき、トーリーは夢をみているのだろうかと思問している。そして先に述べたようにトーリーの部屋でも、夜明かしの蠟燭が、光と影の織りなす不思議な世界を造りだしているのである。

現実の外の世界から館は洪水や堀で外界から遮断されていたが、館と庭は雪で更に現実の世界から、もう一つの世界へと変身する。クリスマスも近づいた頃、一晩で大雪に覆われた館の庭をボストンは「すっかり魔法にかかっていた。」⁽⁷⁾と表現している。子どもたちが初めて姿を

現し、トーリーを仲間に入れてくれたのは、そうした雪の庭のイチイの木に出来た雪のテントの中だった。テントの中は、雪の壁を透かして明るいオパール色の光が差し込みキラキラと光り、トビーとアレクサンダーは真ん中の幹にもたれ、リネットはその足元の枯れ葉の絨毯に座っていた。夥しい小鳥たちが枝にとまり、トピアリーの動物たちが、一緒に遊んでいた。その時のことをトーリーは「天国にいて、雲の中で遊んでみたいだった。」⁽⁸⁾とオールドノウ夫人に報告している。

ボストンの愛する館をモデルにしたグリーン・ノウ館は、詩情あふれる美しい文体で、現実と非現実の交錯する不思議な空間として描かれている。神宮輝夫氏も「ボストンは、屋敷の様子とその周辺を豊かな雰囲気のある筆で入念に描写しているので、こうした異様な出来事も自然で迫真性があり、読む者は、現在の人間と過去の人々が同居する心霊状況をいわば自然なものに感じとってしまう」⁽⁹⁾と評価している。

不思議な館の過去と現在との橋渡しの役割を果たしているのは、曾祖母のオールドノウ夫人である。長い人生を生き、様々な経験をし現役を退いた老人は、時間を超越したところで生きている。現役で人生を闘っている親とは別の、ゆとりと包容力のある老人には、子どもたちの心が良く見えることがある。まして血縁の孫、曾孫に至っては尚更のことであろう。先祖代々の歴史が刻まれた館に住んでいる夫人は、館から離れて生活していたトーリーに家族の歴史を伝えていく。

お母さんが亡くなって二度目のお母さんとうまくいかないトーリーは、ビルマに住んでいる家族と離れて一人でイギリスの寄宿舎のある学校に来ていた。家族と離れて一人でいるトーリーは孤独で、お兄さんとか妹がいたらどんなに良いだろうかといつも思っている。夫人も幼いころ両親を亡くし兄弟もなく、この館の叔父に引き取られ育てられたのだった。その当時館には子どもはいなかったの、彼女も孤独な子ども時代を過ごしていた。そして今また年をとりたった一人でこの館に住んでいる。トーリーが館に着いた翌朝、朝食のテーブルにつくと、昨夜は気がつかなかったが暖炉の上に3人の子どもと2人の女性が描いてある大きな油絵が掛かっていた。絵のなかの5人はトーリーをじっと見つめている。5人はトーリーの先祖のオールドノウ家の人達で、子どもたちは300年前にペストで亡くなったトビー、アレクサンダー、リネットの3兄妹で、後ろにいるのが子どもたちのお母さんとおばあさんである。暖炉の上に掛かった子どもたちを描いた絵を見ながらトーリーは夫人に質問する。

「おばあちゃんには、きょうだいはいなかったの？」

「いなかったのよ。でも、わたしは、きょうだいがいるつもりで遊んだわ。さびしかったものね。だから、人形の家にベッドを四つ入れたのよ。」

「この子たちと、きょうだいのつもりで遊んだんですか？」

と、トーリーは絵をゆびさしてたずねた。オールドノウ夫人は、じっとトーリーを見つめた。

「そうなの、トーリー。どうしてそれがわかったの？」

「ぼくだったらそうすると思ったもの。」⁽¹⁰⁾

淋しい子ども時代を過ごした、そして過ごしている二人には相通ずるところがある。三兄妹は淋しい友達を求める幼い頃の夫人の心に応えて一緒に遊んでくれ、そして今又一人で暮らしている彼女の所に遊びにきている。そんな事は全然知らないトーリーだが、幼い頃の夫人と同じようにこの子どもたちと兄妹になって遊びたいと思うのだ。

トーリーはオールドノウ夫人の息子、トーリーにとっては祖父にあたるトーズランドに顔も瓜二つで名前も同じだった。館に着く前から館をノアの方舟に見立てて空想のなかで遊んでいた話を聞くと、夫人はびっくりしてしまった。この家の子どもたちは代々そうして遊んでいたのだ。初めて会った時、二人は初めて会ったような気がしなかったし、トーリーは初めて訪れた館なのにわが家に帰ってきたような気がしていた。体内を同じ血が流れている血縁の人間が同じような体質、感性、思考経路を持ち合わせている事、そして古い館の霊に同じように感應する力も潜在的に持っている事をうかがわせる。館に住んでいた先祖の子どもたちの霊も、トーリーが一族の子孫である故に彼に感應するのだろう。

子どもたちがなかなかトーリーに姿を現さないのが、そんな時夫人は子どもたちのお話を色々語ってくれる。曾祖母のオールドノウ夫人は、絵に描かれている子どもたちのおばあさんと時にはイメージが重なりあい、古い館の歴史と祖先とをトーリーに伝え、過去の子どものたちとトーリーとの出会いの導き手となり物語にリアリティを与えている。

しかし、もう一つの読み方をすると、「この子たちと、きょうだいのつもりで遊んだんですか。」「ぼくだったらそうすると思ったもの。」と言うトーリーの言葉は、オールドノウ夫人とトーリーは同じ血縁で、育った環境が酷似し、同じ体質で同じ感性を持っていて、一緒に「ごっこ遊び」をしているようにも思えてくる。古い館に一人で住んでいて恐ろしいくらいに歳をとっている夫人は、時の観念を喪失し、現在と過去が不思議に混ざり合った幻想の中で生きている。そうした老人の幻想の世界に、トーリーの精神も共鳴し、一緒になってはいりこんでいるのではないかと思えなくもない。しかし乗る人もいないのに木馬が揺れたり、男の子の声を聞くのは、夫人から子どもたちの話を聞く前だった事を思えば、子どもたちの存在は夫人の幻想のなかであったということにはならない。しかしながらオールドノウ夫人は、現在と過去が出会う不思議な物語の謎を更に深くする不思議な存在であり、作品に重層的な深さを与えていると言えよう。

しかしながら、ファンタジーの世界へと読者を導いてくれる優れた導入や、幻想的な館や道具使いにも増して、この物語にリアリティを与えている最大の特徴は、三兄妹トビー達の出現のプロセスにあるのではないだろうか。子どもたちがトーリーの前に姿を表すプロセスは最初は音や声が聞こえ、気配を感じ、触れそして目に見えるようになる、即ち我々の五感に訴えているのである。

トーリーの身近に子どもたちの存在が感じられるのは、オールドノウ夫人から子どもたちの話を聞く以前からだった。館に泊まった最初の朝、目を覚まし目を閉じて横になっていると、ゆり木馬のキーキー動く音が聞こえる。しかし目を開けるとその瞬間、木馬の揺れが止まったような気がした。そして翌朝、朝御飯の前に小鳥たちに挨拶するために、マーガリンを塗ってもらった両手を集まってきた小鳥たちに差し出し、くすぐったいのと、へんな感じがするのと

で目をつぶって顔をしかめじっと立っていると、傍には夫人しかいないのに男の子の笑い声がしたような気がした。

夫人から館に住んでいた子どもたちの話を聞いてからのトーリーは、子どもたちのことをいろいろと考えたり想像したりしていた。初めて子どもたちの声を聞いたのは、月明かりの晩ベッドに横になっている時だった。小さなはだしの足が床を走り回る音や、笑う声、ささやく声、それに大きな本のページをめくる音が聞こえるような気がして、「どこにいるの？ 明るいほうへ出ておいでよ。」と呼びかけると別の方から笑い声が聞こえ、そちらの方にふりかえると今度は、今まで見ていた方からパタパタいう足音とひそひそ声が聞こえてくる。「きみたち、ぼくをからかっているの？」とたずねると、くっくっという笑い声が戻ってきてトーリーも思わず笑ってしまい、幸せな気分になって眠りについた。真夜中に姿は見えないのに、子どもたちの声が聞こえたり、動き回る音が聞こえたら、それは怪奇現象であり、普通は怖い事ではないだろうか。しかしこの作品では、子どもたちについては、幽霊としての表現は一切されていないし、トーリーもそうした現象を怖がることは一切ない。この物語は幽霊物語ではないのである。回りに子どもたちの気配を感じることはトーリーには喜びである。そして子どもたちの気配が感じられるのは夜に限らず、かつては子供たちの部屋で、今はトーリーが使っている部屋だけに限られてはいない。昼日中庭でも感じられる。トーリーが一人で庭をぶらついていると、子どもたちは姿は見せないが、トーリーとかくれんぼをして遊び、頭にTの字をした小枝を残していく。しかし子どもたちは毎日遊んでくれるわけではない。声や気配は感じられても仲間に入れてくれない日もあった。ただ小枝が道しるべの矢印のように並べてあって、たどってみると沢山の小枝でT. A. L. の頭文字が書いてあったりする。子どもたちは存在する証拠の品を残していくのである。

初めて子どもたちが姿をちらりと見せたのは、玄関の間の鏡の中だった。笑いをこらえたりネットとアレクサンダーの黒い目がトーリーをじっと見ていたが、スーと消えてしまった。トーリーはいつも一緒にいたいと泣くが、オールドノウ夫人は子どもたちは人見知りをする動物みたいで、ぜったい大丈夫だと思うまでは出て来ないということや、最初は鏡のなかに時々姿を見せるということを説明し、辛抱するよう慰めてくれる。

そしてトーリーが子供部屋で本を読んでいると、リネットの両手が後ろからトーリーの眼を塞ぎ、耳元に彼女の息吹を感じた。トーリーが手を延ばすと、とても小さな手と、巻き毛と、柔らかなレースの着物に触れた。姿は見えないが、子どもたちは、まぼろしの存在では無く、手で触れる事のできる実態をそなえた存在なのである。

大雪が降り庭は一面真っ白な雪で覆われた日に、子どもたちはついにトーリーを兄妹として受け入れ、トーリーに初めて姿を見せ、仲間として会話を交わしてくれたのだ。庭のイチイの木に出来た雪のテントの中には、小鳥や動物たちもいて、アレクサンダーはフルートを吹き、トビーは鹿に餌をやっていて、リネットは野うさぎと遊んでいた。

クリスマスの朝、雪はすっかり溶けてしまっていたが、オールドノウ夫人とトーリーが小鳥や動物のために、チーズや木の実の御馳走を飾りつけた、あのイチイの木のところで、子どもたちとトーリーは小鳥や動物たちと朝御飯のパーティを楽しんでいる。アレクサンダーは、後から冷静に考えてみれば不思議なことなのだが、現世のナッツを食べているのである。

兄妹になった彼らには、もうバリアーとしての鏡も雪のテントもいらぬ。子どもたちに兄妹の仲間に入れて欲しいというトーリーの一途な気持ちを通じ、時を越えて時と空間を共有する兄妹になれたのである。朝日の中で、楽しい現実の時を共有しているのである。

子どもたちが姿を現しトーリーを仲間に入れてくれるまでのプロセスは、喜びと失意と忍耐が織りまじり、緊張感あふれクライマックスへと進行していく。300年前にベストで死んだ子どもたちは館に住む「幽霊」であるはずであるが、トーリーの認識のなかでは一緒に遊んで欲しい子どもたちとして存在している。読者である我々も7歳のトーリーの視点で、トーリーと一緒に遊んで子どもたちが姿を現して一緒に遊んでくれるのを待ち望んでいる時、子どもたちは決して幽霊ではなく、実在する子どもたちに成っているのである。声が聞こえ、気配を感じ、目に見えそして触れ、話しをし一緒に遊ぶ、子どもたちの出現のプロセスは、子どもたちの存在が我々の五感で確かに感じとれることのできる実態ある存在となっていくのである。

自伝によれば、この作品はもともとは大人の作品として Faber and Faber 社から出版されることになっていた。息子のピーターが挿絵を描き、ボストンもその挿絵が大変気に入っていたが、社としては挿絵入りの大人の本は出版しないことになっていたので、急遽子どもの本として出版されることになったのである⁽¹¹⁾。イギリスでは、子どもの本と大人の本が、日本ほど明確に分けられてはいないが、いずれにしても『グリーン・ノウの子どもたち』は子どもの為の本として書かれた訳ではなかった。ボストンはこの幻想的な美しい作品を、タイムスリップする物語、夢の世界の物語、鏡の世界の物語、お婆さんの幻想の世界を共有したごっこ遊びの物語として書くことは容易だったのではないだろうか。過去においてそうした物語は存在している。その方が読者には理解しやすく受け入れやすいはずである。しかしボストンはあえてそうした方法はとらなかった。

彼女は本を書く動機を、書くこと自体が自分の楽しみであったこと、そして「大人には現在では時代後れとされている喜びを思い出して欲しい。子供達には自分の為に、まず自分の感覚を使うこと、信じることを奨励したい一耳、目、鼻、指、足の裏、皮膚、皮膚呼吸、筋肉をつかう喜び、筋肉のリズム、心臓の鼓動...想像力は感覚を直接刺激することから生まれるのです。」⁽¹²⁾と述べている。12世紀に建てられた古いマナー・ハウスに、オールドノウ夫人のようにたった一人で住む62歳になったボストンは、館に住む幽霊たちとの出会いに答えるように、館を舞台とし、夫の許に残してきた息子ピーターをモデルにして、館の霊と幼い頃の息子ピーターが遊ぶお話を、想像力を巡らせながら、楽しみながら書いたのではないだろうか。夢、鏡、幻想等の可能性を巧みに織りませ、神秘的な世界を重層的に描き、五感に訴えることで、実在を実感させる「幽霊」の子どもたちと本当に遊ぶ世界を物語ることを楽しんだのではないだろうか。

トーリーが遊んだ子どもたちは、理性的に考えれば幽霊であると言えよう。しかし「もちろんトーリーでも、あの子たちが年もとらずに何世紀も生きているはずのないことは、知っていたにちがいない。だがトーリーは、そんなことは考えたことがなかったのだ。少年にとって、あの子たちは、とても身近で、真実みがあり、この世にかけがえのないじぶんの家族だった。」⁽¹³⁾と書かれているように、トーリーにとって、子どもたちは幽霊ではなく家族だった。家族

愛に恵まれなかった孤独なオールドノウ夫人やトーリーが、先祖代々の住む館で、兄妹をみつけ、孤独な心が癒されるのを一緒に喜ぶ事が出来たとき、五感で感ずる子どもたちの出現のプロセスを、我々の全存在の感覚で素直に受け止めていくとき、読者の心の中でも、理性を越えたところで、子どもたちは実在する確かな存在になるのではないだろうか。

ジャスパー・ローズは「ボストン夫人の強さの一つは、彼女は決してミステリーの説明をしようとしなない事である。…彼女は読者に読者が望む以上のことを信じるように決して強制しない。」⁽¹⁴⁾と述べている。『グリーン・ノウの子どもたち』を読む楽しみは、不思議な出来事に理性的な説明を試みる事にあるのではなく、個々の読者の想像力の質にまかされているのであろう。

テキスト：Lucy M. Boston, *The Children of Green Knowe*, Puffin Books, 1980
 亀井俊介訳『グリーン・ノウの子どもたち』評論社、昭和56年

注

- (1) Laura Standley Berger ed., *Twentieth-Century Young Adult Writers*, St. James Press. p. 69
- (2) John Rowe Townsend, *Written for Children, An Outline of English-language Children's Literature*, Penguin Books, 1980. p. 245
 高杉一郎訳『子どもの本の歴史 下』岩波書店 1982年. p. 61
- (3) Humphrey Carpenter & Maria Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature*, Oxford University Press, 1984. p. 77
 神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』原書房 1999年. p. 758
- (4) Lucy M. Boston, *Memories*, Colt Books, 1992. p. 177
- (5) JBBY '96国際講演会「ルーシー・ボストンの思い出」1996年9月27日、於日本出版クラブ会館
- (6) 林 望『イギリスは愉快だ』平凡社、1993年. pp. 236-237, p. 239
- (7) Lucy M. Boston, *The Children of Green Knowe*, p. 86, 亀井訳 p. 134
- (8) *ibid.* pp. 91-92, 亀井訳 p. 143
- (9) 神宮輝夫『現代イギリスの児童文学』理論社、1996年. p. 85
- (10) *ibid.* p. 27, 亀井訳 p. 42
- (11) *Memories*, pp. 288-289
- (12) Anne Cammire ed., *Something about the Author*, vols. 19, Gale Research, 1980. p. 45
- (13) *ibid.* p. 73, 亀井訳 pp. 115-116
- (14) Gerard J. Senick ed., *Children's Literature Review*, vols. 3, Gale Research, 1978. p. 23